

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座4-13-11 文明堂3F
電話三五四一-1547 七一

清元協会

世田谷区桜一-13-12
電話三七〇六-1952 二七番

財団法人 古曲会

中央区銀座八-16-13 新橋会館
電話三五七-1021 二六番

新内協会

新宿区神楽坂六-1-27
電話三二六〇-1804 四番

常磐津協会

港区南青山七-17-15
電話三四〇七-7453 五番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二-11-19 一九一四
電話三五四二-1656 四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二-15-12 1403
電話三五八五-1991 一六番

(五十音順)

助成 東京都

芸団協・邦楽振興基金

(CPR A (美演家著作隣接権センター))

平成十六年三月三日(水)

国立劇場小劇場

第一部 十二時開演 三時三〇分終演

第二部 午後四時開演 七時三〇分終演

2004 都民芸術フェスティバル

第三十四回

邦楽演奏会

邦楽名曲選

2004都民芸術フェスティバル参加公演一覧

種目	演目等	開催日/会場	連絡先(主催団体)	
特別公演	舞台芸術の胎動スペシャル〜古典から現代・未来へ〜	1/10 青山劇場	特別公演実行委員会 03-3237-2222	
オペラ	東京二期会オペラ劇場公演 R.シュトラウス作曲「エジプトのヘレナ」	2/20・21・22 東京文化会館大ホール	二期会オペラ振興会 03-3796-1831	
	藤原歌劇団公演 ロッシニ作曲「アルジェのイタリア女」	3/11・13・14 東京文化会館大ホール	日本オペラ振興会 03-5466-3181	
	東京オペラ・プロデュース公演 R.シュトラウス作曲「カプリッチオ」	3/19・20 なかのZERO大ホール	東京オペラ・プロデュース 03-3530-5181	
	日本フィルハーモニー交響楽団	1/28 東京芸術劇場大ホール	日本演奏連盟 03-3437-6837	
東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団	2/6			
NHK交響楽団	2/14 東京文化会館大ホール			
東京都交響楽団	2/17			
新日本フィルハーモニー交響楽団	3/5			
読売日本交響楽団	3/13 東京芸術劇場大ホール			
東京フィルハーモニー交響楽団	3/21			
オーケストラ	東京交響楽団	3/23		
	室内楽	「フルート&ヴィオラ&ハープのタベ」 「チェロ&ピアノのタベ」	1/16 2/10 東京文化会館小ホール	
ポピュラー	「シャンソン&タンゴハイライト」	3/10	日本演奏連盟 03-3437-6837	
	「永遠のラテン名曲集」	3/11		
	「ジャズ・スタンダード」	3/12		
邦楽	第34回邦楽演奏会 義太夫・清元・古曲・新内・常盤津・長閑・三曲	3/3 国立劇場小劇場	日本演奏連盟 03-3541-5471	
現代演劇	「boy be...」	1/17~25 本多劇場	日本劇団協議会 03-3341-8151	
児童・青少年演劇	合同公演「江戸に水が来た日」	3/20~31 ルネこだいら、東京芸術劇場他	日本児童・青少年演劇団協同組合 03-5269-2036	
バレエ	「眠れる森の美女」	2/5・6・7 東京文化会館大ホール	日本バレエ協会 03-3499-5525	
	バレエ「ドラゴン・クエスト」	2/28・29 ゆうぽーと簡易保険ホール	スターダンサーズ・バレエ団 03-3401-2293	
	「真夏の夜の夢」	3/5・6 ゆうぽーと簡易保険ホール	東京シティ・バレエ団 03-5638-2720	
現代舞踊	「OTHERS」、「いのちの器」、 「二つの集体」、「火の鳥」	1/23・24・25 新国立劇場小劇場	現代舞踊協会 03-3400-4544	
日本舞踊	第47回日本舞踊協会公演	2/12・13・14 国立劇場大劇場	日本舞踊協会 03-3533-6455	
能楽	第44回 式能	2/15 国立能楽堂	能楽協会 03-5925-3871	
民俗芸能	第35回東京都民俗芸能大会 「東京の伎芸と曲芸」	3/6・7 東京芸術劇場中ホール	東京都民俗芸能大会実行委員会 03-3234-6800	
寄席芸能	第34回都民寄席	三遊亭圓歌ほか	2/20 立川市市民会館大ホール	都民寄席実行委員会 03-3833-8622
		春風亭小柳枝ほか	2/26 小笠原小中学校	
			2/27 母島小中学校	
		桂文治ほか	3/5 東京芸術劇場中ホール	
		橘家圓蔵ほか (浪曲の会) 玉川福太郎ほか	3/6 3/31 八王子市民会館 東京芸術劇場中ホール	



二〇〇四年都民芸術フェスティバルの開催に寄せて

東京都知事 石原 慎太郎

都民芸術フェスティバルは、都民の皆さんに良質な芸術文化に触れる機会を広く提供し、東京における芸術文化活動の振興を図ることを目的として開催しています。当フェスティバルは、東京都が芸術文化団体の公演に助成して開催するもので、今年で三十六回目を迎えます。

現在では、東京の新春を彩る行事として定着しています。関係団体の皆様のご尽力に心から感謝申し上げます。

今年、「TOKYO文化の創造―劇場へ行こう!」をテーマに、延べ七十四公演を実施します。東京から創造性あふれる芸術文化を発信し、都市の魅力と活力を高めていきたいと思えます。

都民の皆さんには、一月から三月まで、音楽、演劇、舞踊、伝統芸能など、さまざまな分野の舞台芸術を都内各地でお楽しみいただけます。また、次代を担う若い方々にも舞台芸術に親しんでいただけるよう、ほとんどの公演に学生割引や学生席を設けています。この機会にぜひ、鑑賞していただくことを願っています。

最後に、本フェスティバルに参加された邦楽連合会の公演のご成功とますますのご活躍を祈念し、あいさついたします。

第一部 番 組 (十二時開演)

一、 萩江節

深川八景 ふか がわ はっ けい

同 同 同
萩江 萩江 萩江
幸 幸 幸

同 同 三味線
萩江 萩江 萩江
みさと 香世 都世

二、 新内節

関取千両幟 せき とり せんりょうのぼり

—— 稻川内 —— いながわうち

同 浄瑠璃 鶴賀須磨寿々
鶴賀須磨之助

上調子 三味線 富士松 菊三郎
富士松 菊子

三、 清元

忍逢春雪解 しのび あう はるの ゆき どけ

(三千歳) みちとせ

同 同 同
浄瑠璃 清元 延崎若
清元 延栄一
清元 延清恵
清元 延志佐枝

同 三味線 清元 延志佐
同 清元 延志寿佳
上調子 清元 延美夏

四、 義太夫

恋女房染分手綱 こいにようぼうそめわけたづな

—— 重の井子別れの段 —— しげいこわかだん

浄瑠璃 重の井 竹本駒之助
三吉 竹本綾之助

三味線 鶴澤 津賀寿

—— 休 —— 憩 (十分) ——

五、

長唄

みやこ

風流ふうりゅう

唄 杵屋 三千寿
同 稀音家 廣
同 稀音家 康花

三味線 稀音家 康
同 日吉 小静
同 稀音家 一宣

六、

常磐津

戻もどり

橋ばし

浄瑠璃 常磐津文字増十
同 常磐津文字由岳
同 常磐津 美奈衛

三味線 常磐津文字孝代
同 常磐津文字東久
上調子 常磐津 孝野

七、

箏曲

梅うめ

の

功いさお

唄 高橋 榮清
同 松崎 榮琴
同 原田 榮秀華
同 渡辺 志榮璃
同 稻垣 榮珠穰

箏 増田 榮泰
同 小林 榮景
同 森永 榮華弥
三弦 齋藤 孝枝

(終演予定 午後三時半ごろ)

第二部 番 組 (午後四時開演)

一、地歌 尾上の松

三弦本手
藤井久仁江
藤井昭子
滝澤郁子
松枝久美子
牧野芳江
花園文代
竹内恵子
杉山朋子
高田裕子
松野弘美
伊藤三津江
市川トミ子
野田郁代
司城静子
中小路奈都子
田中淑子
林田秀子

三弦替手
藤井泰和
朝岡晃世
小池郁子
渡辺明子
塚本桂子
尾田美鈴
辻本啓子
安藤子

二、義太夫 本朝廿四孝

ほん ちょうにじゅうし こう
浄瑠璃 竹本越道
三味線 鶴澤友路
| 十種香の段 |

三、宮菌節 箕輪の心中

みの わ しんじゅう
浄瑠璃 宮菌千碌
同 宮菌千碌司
同 宮菌千碌恵
三味線 宮菌千加寿
同 宮菌千文
同 宮菌千碌美

四、新内節 道中膝栗毛

どう ちゅう ひざくり げ
浄瑠璃 鶴賀 岳代寿
三味線 鶴賀 喜代寿郎
上調子 鶴賀 寿美之助
| 市子口寄せの段 |

休 憩 (十分)

五、清元 祇園一力の段

(鳥刺)

浄瑠璃	清元	美寿太夫	三味線	清元	美治郎
同	清元	清栄太夫	同	清元	栄吉
同	清元	一太夫	上調子	清元	美三郎

六、常磐津

積恋雪関扉

(下)

浄瑠璃	常磐津	津太夫	三味線	常磐津	八百二
同	常磐津	光勢太夫	同	常磐津	紘寿郎
同	常磐津	和英太夫	上調子	常磐津	祐二郎

七、長唄 二人 人 椀 久

唄	杵屋	六美朗	三味線	杵屋	寒玉
同	杵屋	直吉	同	杵屋	勘五郎
同	和歌山	富朗	同	杵屋	彌四郎
同	杵屋	巳津也	同	松永	忠一郎

笛	中川	善雄
小鼓	藤舎	呂鳳
同	藤舎	呂英
立鼓	藤舎	呂船
大鼓	藤舎	円秀

(終演予定 午後七時半ごろ)

○一部の出演者に変更のある場合はお許し願います。

第一部

一、萩江・深川八景

作詞・作曲者未詳。明治九年（一八七六）に深川の豪商飯島喜左衛門が、四代目萩江露友を襲名した時、その祝儀曲として初演されたという説がある。また四代目露友の作曲という説もあるが、現在のところよくわからないが、萩江の代表曲として人気が高い。

内容は深川の名所を近江八景になぞらえて歌ったもの。邦楽にはいろいろな八景ものがある（吾妻八景、巽八景、廓八景、吉原八景、向島八景、播磨八景など）が、いずれも中国の瀟湘八景をもとにして、近江八景から江戸の八景ものにと多くの変化が生れた。

深川は江戸の辰巳（東南）にあたり、江戸時代には深川芸者などがいて人気のある遊び場であった。この曲は深川の風物を八景に見立てた歌詞で、長唄の「巽八景」と同じ趣向の曲。江戸時代末ごろには八景物が流行していて、絵画にも浮世絵に「××八景」というのが盛んに刊行されている。

二、新内・関取千両幟

初代鶴賀若狭掾の作曲とされてきたが、あるいは鶴賀二代目家元鶴吉の作曲かも知れない。原拠は義太夫節の「関取千両幟」。その二段目から「稲川（原作は岩川）内」と「相撲場」を新内に移したもの。

かねて最良筋の浄久の息子礼三郎のために、その恋人錦木の身請けの二百両が必要になった力士稲川は、今日の鉄ヶ嶽との取り組みにわざと負けてやろうと決心する。そんな大事なことを話してくれないので、女房おとわは不満である。髪を梳きながら「相撲取りを夫に持てば……」以下のクドキがきかせる。これは後に義太夫に逆輸入された。

なおこのあとは、いよいよ相撲の取り組みが始まり、稲川が危うくなった時、二百両の進上金が読み上げられ、稲川は見事に鉄ヶ嶽を倒す。その金はおとわが身を売った金であった。

三、清元・忍逢春雪解（三千歳）

河竹黙阿弥作詞、清元お葉（四世延寿太夫の妻）あるいは二世梅吉作曲といわれ、この二人の合作だったかも知れない。明治十四年（一八八一）三月、東京新富座で「天衣くもにまじりうえの紛上野初花」の六幕目大口屋寮の場で、余所事よそごと浄瑠璃として初演された。

お尋ね者になった片岡直次郎は、逃げる途中で恋人の三千歳に一目逢いたくなる。入谷の寮で三千歳が療養中と知り、雪の中、尋ねて行く場面で使われた。歌舞伎ではこの前に蕎麦屋の場があり、蕎麦を食べながら手紙を書き、按摩の丈賀に託す。またそのようすをうかがっていた丑松が、自分の身の安全のため訴人をするというエピソードがある。

季節的にも今日の演奏会にふさわしい演目となっている。

四、義太夫・恋女房染分手綱―重の井子別れの段―

吉田冠子・三好松洛の合作。宝暦元年（一七五一）二月、大坂竹本座で初世竹本土佐太夫、竹本大隅掾らによつて初演された全十三段の時代物。近松門左衛門作の「丹波与作待夜の小室節」の改作だが、これに由留木家のお家騒動を加えて複雑な筋が展開する。今日演奏されるのは、もつともよく知られた十段目の後半。

由留木家の御物頭伊達の与作は、若殿の恋人の身請金三百両を盗まれ、かつ腰元重の井との不義のために勘当される。与作は馬子となり、また与作と重の井の子は、自然生しぜんせいの三吉となり、同じく馬子となっている。いろいろあつて由留木家の息女調姫の乳人となっていた重の井は、姫が養女となつて東国へ下る途中、姫の相手をした三吉と対面する。

ここから今日の演奏で、もつともよく知られた場面。

五、長唄・みやこ風流

久保田万太郎作詞、四世吉住小三郎と二世稀音家浄観作曲。昭和二十二年六月一日、長唄研精会第四百回記念演奏会の新作として、旧帝国劇場で初演。はじめは「市尽し」という曲名であった。

内容は、はじめ「市尽し」といったように、明治・大正ごろの東京のさまざまな市を並べたもの。「千成市」は「ほうづき市」、「草市」は「盆市」で盂蘭盆会に必要な草花などを売る市。「菊供養」は市ではないが、九月九日の菊の節句には浅草寺でお練りが行われる。「べったら市」は十月十九日で粕漬を売る市。「酉の日近き」は「酉の市」に近い日。「年の市」は十二月十七、十八日に開かれ、正月のお飾りなどを売る市だったが、今日では「羽子板市」と名が変わっている。

焼け野原となった東京で、むかし賑やかだった情景を思い出し、なつかしがる気持ちが美しく表現されていて、短いが人気曲となっている。

六、常磐津・戻橋

河竹黙阿弥作詞、六世岸沢式佐作曲。明治二十三年（一八九〇）十月、東京歌舞伎座で初演された。新古演劇十種の内。

源頼光の四天王の一人、渡辺の綱が一条戻橋で、女に化けた悪鬼に逢い、正体を見破ってその片腕を切り落としたという『平家物語』にある話を舞踊劇にしたもの。この話を戻橋から羅生門に変えて作ったのが能の「羅生門」。摂州渡辺の里に住んだので渡辺氏を名乗ったという綱は、武勇にすぐれ、大江山で酒呑童子を退治したことも知られる。

なおこの後日譚として、長唄に「綱館の段」があり、同じ趣向の「茨木」もある。

七、箏曲・梅の功

高橋箏庵（一八九六〜一九三九）作詞、初代高橋栄清（一八六一〜一九三七）作曲。もと東明流のために作詞されたもの。

内容は梅の花をたたえつつ、関連する和漢の故事を述べたもので、まず中国広東省にある梅の名所羅浮山で夢に美少女に逢う心地がするところから始まり、松と竹にも比べられる気高さと香りを述べる。次いで宋の詩人が梅を愛でたことを述べ、『伊勢物語』から有名な「月やあらぬ…」の和歌を引いて昔の春の夜をしのぶ。終りは梅の盛りになれば天地万物芳香に満ちて、人の心まで清く美しくなると結ぶ。今日の演奏会には季節的にももつともふさわしい演目といえよう。

第二部

一、地歌・尾上の松

九州系の地歌三弦古曲として、その手事ものの代表曲として知られ、祝儀曲としてよく演奏されるがかなりの大曲。

内容ははじめ能の「高砂」から借りたもの。あと播州加古川にある尾上の松の長寿にちなんで、平和な時代が永遠に続くことを願うというもの。初めの手事は「楽三段」ともいわれ、雅楽風な感じを与える。後の手事は「神楽拍子」ともいわれ、二段の手事とチラシから成り、「神楽地」が合わされる。

なお、大正八年に宮城道雄が箏の手をつけ、翌年川瀬里子の三弦で東京音楽学校における第二回作品発表会で演奏してから、世に知られるようになった。

二、義太夫・本朝廿四孝―十種香の段―

近松半二、三好松洛、竹田小出雲らの合作。明和三年（一七六六）一月、大坂竹本座で竹本島太夫、初世竹本住太夫らによって初演された時代物五段浄瑠璃。

武田信玄と上杉謙信の争いを素材にして、それに斉藤道三の足利將軍暗殺、山本勘助の出仕、信玄の嫡子勝頼と謙信の息女八重垣姫の恋などをからませ、さらに諏訪湖の白狐伝説や二十四孝の説話を取り入れた非常に複雑な作品。今日はもつともよく知られた四段目の切「十種香の段」を演奏する。

武田信玄の嫡子勝頼は、取り替え子の偽の勝頼Ⅱ養作の死後、養作を慕っていた腰元濡衣とともに、葉売りとなって信濃へ下り、花作りの養作となって謙信の館へ入り込む。そして濡衣のはからいで、許嫁の勝頼が死んだと思つて嘆き悲しんでいる八重垣姫に逢う。このあと諏訪法性の兜は八重垣姫の手で武田家に返る。

三、宮園節・箕輪の心中

岡本綺堂の同名の戯曲から、岸井良衛作詞、四代目宮園千寿作曲。昭和三十九年発表。

四千石の旗本藤枝外記が、吉原の草市見物に行った時、人ごみの中ですれ違った遊女の袖口に刀がからんだ。遊女はしきりに謝つたが外記はそのまま行き過ぎたが、振り返ると遊女も振り返つて笑つた。遊女は京町二丁目大菱屋久右衛門抱えの綾衣。これをきつかけに外記はしばしば綾衣のもとへ通うようになり、評判になつた。幕府は外記を山流しといわれた「甲府勝手」にするといううわさ。養子であつた外記は、綾衣についた札差と張り合い大金を浪費し、わずかな金にもつまる。天明四年（一七八四）四月十七日、吉原は火事で全焼。仮宅から抜け出した二人は、七月九日に心中。外記二十八歳、綾衣十九歳であつたという。「君と寝ようか五千石取ろうか…」の歌が流行した。

岡本綺堂の戯曲「箕輪の心中」は明治四十四年、二世市川左團次一座で初演された。

四、新内・道中膝栗毛―市子口寄せの段―

十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』から富士松魯中が作詞・作曲。自筆本に嘉永三年（一八五〇）八月完成とある。

東海道を西へ向かつている弥次郎兵衛と喜多八は、富士川まできたところで川止めにあい、一度は川端へ出て「日高川」の稽古でもしようとするが、宿で寝ているほかにすることがない（ここまでは省略）。ふと隣座敷を覗いて見ると女性がいる。これが瞽女と巫女たちである。大騒ぎのあと、巫女に口寄せをしてもらい、弥次郎兵衛の死んだかみさんを呼びだしてもらおう。そこでおかしみが楽しい。

なお、この曲と「赤坂並木の段」「組打の段」とを「弥次喜多三段」という。

五、清元・祇園町一力の段（鳥刺）

三升屋二三治作詞、初世清元齋兵衛作曲。天保二年（一八三一）六月、江戸市村座で忠臣蔵の書替狂言「夏浴衣国字小紋」の「祇園町一力の段」の劇中の所作事として初演されたと推定される。

鳥刺というのは、細長い竹の先端に鳥もちをつけ、小鳥をくつつけて捕らえるのを職業にしていた人のことで、そのもとは將軍家で飼っていた鷹の餌にするのが目的であつた。それが次第に民間にも広がって、大正ごろまでは見かけられた。

この曲は「さす」という言葉の連想からはじまり、鳥尽し、鳥刺の動作、失敗したあとは一力茶屋らしく座敷芸の遊びでしめくくる。江戸時代末ごろの風俗舞踊だが、いかにもしゃれた、気持ちのいい雰囲気で終始している。

六、常磐津・積恋雪関扉（下）

劇神仙宝田寿葉作詞、二世岸沢式佐作曲。天明四年（一七八四）十一月、江戸桐座の顔見世狂言「じゅうにひとえこまちぎく重人重小町桜」の大切浄瑠璃として初演された。ふつう上下に分けて演奏されるが、今日は時間の都合で後半の下の一部を演奏する。

四位の少将良岑宗貞は、亡き仁明帝を偲んで、帝の愛樹であつた小町桜のある逢坂山の関所のそばに庵を結んでいる。関守の関兵衛は、通りかかった小野小町に好意を示すが、二人は関兵衛を怪しいとにらみ、小町は小野篁へ知らせに行く（ここまでが上）。

小町姫が帰つたのを知らない関兵衛は、宗貞をからかい、塚の神に祈るため桜を伐ろうとすると、懐にあつた勘合の印が飛び去り、意識も朦朧となる（今日はここから）。

茫然となつた関兵衛の前に小町桜の精、墨染が傾城姿であらわれる。そして廓話になつたと、互いに見あらしになり、やがて墨染の姿は消え去る。

天明期の顔見世狂言らしく、話の筋は荒唐無稽であるが、それだけに大胆に組み立てられていて、スケールの大きな構成になっている。人間世界と自然界が渾然一体となつた作品で、人氣が高く、たびたび上演されている。数ある常磐津の作品の中でも、もつとも大曲といわれるばかりでなく、浄瑠璃所作事の中でも一つの完成度を示す作品。

七、長唄・二人椀久

作詞者未詳、錦屋金蔵作曲。安永三年（一七七四）五月、江戸市村座で八代目市村羽左衛門の十三回忌追善として、九代目羽左衛門が瀬川富三郎と初演。本名題を「其面影二人椀久」というのは、享保九年（一七三四）に「二人椀久」を踊った先代羽左衛門の面影をしのぶ意味。もとの「二人椀久」はずでに廃曲になっていたらしい。

延宝（一六七三〜八一）のころ、大坂御堂筋にいた椀屋久右衛門（久兵衛とも）が、新町の遊女松山になじみ、豪遊の末に座敷牢に入れられ、松山恋しさに発狂してさまよい歩いたという事件があった。それを脚色した曲は「椀久もの」といい、義太夫、一中節などにもあるが、長唄にはこの曲のほか「二人椀久」（四季の椀久とも）がある。

「たどり行く」は狂乱した椀久の登場。これや「智恵も器量も」は椀久ものには欠かせない文句。どうぞ松山に逢いたいと祈るうちに眠ってしまう。その夢の中に「行く水に」から松山が登場して二人の踊りになる。二人が楽しかった昔を思い出す。「筒井筒」以下で相思相愛の情を唄い、「お茶の口切り」からふたたび楽しかった昔をしのぶ。

通称の「二人椀久」というのは椀久が二人出るのではなく、椀久のあとを追う松山が、男の羽織を着て踊るところからつけられたもの。数少ない男性の狂乱ものとしても人気が高く、唄も三味線も派手で変化があり、長唄の面白さが十分に堪能できる。

御礼 邦楽連合会

本日はようこそおでかけ下さいまして、ありがとうございますございました。何かと不行き届きの点もございましたが、お許しを願ひまして、どうかごゆつくりとお楽しみ下さいませよう、お願い申し上げます。

今までには、このようにしてまとめて御鑑賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからも、どうか続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますように、お願い申し上げます。

来年も同じくここ国立劇場小劇場で、三月五日（土）に開催する予定でございます。番組がきまり次第、御案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おところ、おなまえをお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願い申し上げます。ありがとうございます。